九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

構成要素の意味放棄と不放棄の境界 : サンスクリット文法学における統合形の意味論的アスペクトに関して(2)

宮本, 均

https://doi.org/10.15017/2328443

出版情報：哲學年報. 56, pp.37-50, 1997-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

構成要素の意味放棄と不放棄の境界

―サンスクリット文法学における統合形の意味論的アスペクトに関して(2)

宮　本　　均

1．はじめに

表現「XのY」と等価である表現「XY」の関係を考えると，一つの問題が生じる。「XのY」における「Y」と「XY」は交換可能である，つまり「XのXY」という表現が成り立ちうる(1)のだが，その場合，「XY」の構成要素である「X」はいかなる意味の在り方を示しているのか，という問題である。

パーニニ（紀元前5世紀）に始まるサンスクリット文法学では，説明の便宜上，統合形「XY」は文「XのY」等から派生すると考えられる。

「Y＝XY」である以上，統合形「XY」は従属要素「X」の意味を放棄している(2)と，一つの可能性として考えられる。つまり，「Y＝（X）Y」と考えるわけである。インド文法家は，統合形「XY」の意味論的アスペクトとして「(X) Y」というものを考える。これが〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉（従属要素の意味を放棄している統合形）であり，これについては既に論じた（宮本［1996］）。

その一方でインド文法家は，従属要素「X」が，意味を放棄しないアスペクトを考える。つまり，「Y＝XY」と考えるのである。これが，統合形のもう一つの意味論的アスペクト，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉（従属要素の意味を放棄していない統合形）である。

一見，この二つのアスペクトは相反するものであるかのように思える。一方において「放棄されている」従属要素の意味が，もう一方においては「放棄さ

れていない」からである。しかし，このことのみからこれら二つの意味論的アスペクトが，統合形の相反する意味論的側面を表すための説明として用いられていると決め付けることもまた，危険であろう。従って，本稿において筆者は，まず文法家の説明するところの〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉とはいかなるものであるかをテキスト（MBh, Pradīpa, Uddyota, VP, PP）に即して明らかにし，その上で，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉の関係について検討を加えてみたい。

2．統合形の意味論的アスペクトとしての〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉

パーニニ文法学派の統合形に対して与えた定義として，パタンジャリ（紀元前2世紀）の「他の意味を表示するもの（parārthābhidhāna）が統合形である[3]」というものが挙げられる。バルトリハリ（5世紀）のVP.VSk.94[4]における発言は，その定義を受けてのものである。

> 無知な者（abudha）達に対して［文から］作られた統合形を説明している者達は，［統合形が］他の意味を示す時に，［従属要素の意味の］放棄（tyāga）と［従属要素の意味への］付加（abhyuccaya）という性質を持つ，と述べた。

この偈における「放棄」が〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉に関わる性質であることは明白である。そして，VP第3章「単語篇」に対する註釈PPを著したヘーララージャ（10世紀）は，「付加」について，物が作られる時の原因（karaṇa）と作られた物である結果（kārya）を比して結果に付加的な（adhika）作用（arthakriyā）が見られるのと同様，他の意味を表示するという結果は，原因である文中の語の意味の二次的付加物（ādhikya）である[5]と述べている。バルトリハリ自身は，この偈以下，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉を扱うにあたって，そのいずれをも明示的に述べてはいない。しかし，このような他の意味を示す統合形の意味論的アスペクトの一つとしての

〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉は，「付加」の面に関っていると考えられるのである[6]。

パタンジャリは，文法規則P2.1.1{samarthaḥ padavidhiḥ}（語に関する規則の適用は，意味上の関係に依存する）に対するMBhにおいて，「自らの意味を放棄しない統合形もありうる」と述べ，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉についての議論を始める[7]。ヘーララージャは「付加」という性質に関して，従属要素の意味が放棄されず残る際の，別の意味の付加は，従属要素の意味の二次的付加物として生じると述べている[8]。

さらに，ヘーララージャは，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉についての時と同様，三つの例を挙げる。第一の例[9]。砂の壺に水を注ぐと，水は砂に吸収されてしまう。しかし，決して水がなくなってしまったわけではない。この場合，水が従属要素の意味，砂が主要素である。第二の例[10]。きれいな色の染料で染められた糸で布を織る。その布にも，染料の色の素晴らしさは残る。この場合は，糸が従属要素であり，布は統合形，そして，糸の色が従属要素の意味である。そして，パタンジャリがMBhにおいて用いた例でもある第三の例[11]。乞食がその日で二番目の施し物を受けた。しかし，彼はその後でも，最初にもらった施し物を絶対に捨てたりはしせず，むしろ，収集（saṃcaya）に心を砕く。

ここでは，「付加」という性格をより明確に読み取ることのできる第三の例を見てみたい。この例においては，乞食を従属要素に，最初の施し物を従属要素本来の意味に，そして，二番目の施し物を統合形が形成された後に付加された意味に，それぞれ準える事ができる。乞食がもともと持っていた施し物を，新しい施し物を得た後に捨ててしまえば〈jahatsvarthā vṛttiḥ〉となる。しかし，乞食は最初の施し物を捨てるどころかより多く持つ事に執着するのである。つまり，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉において起こっている事はこうである。従属要素は，統合形において本来の意味を保持しつつ，「別の意味」としての統合形の意味を表す働きをなすのである。

2.1　両数語尾導入回避について

しかし，ここで一つの反論がある。もし，従属要素，主要素のどちらもが自らの意味を持ちつづけるならば，P1.4.22{dvyekayor dvivacanaikavacane}（二つのものに対しては両数，一つのものに対しては単数がある）に従って，統合形の後には両数格語尾が導入されねばならないというものである(12)。ヘーララージャは，主要素の限定者として機能すべき従属要素が自らの意味を持つのであるならば，両数格語尾の導入があるのではないかという反論があるであろうとする(13)。

この反論に対する答えとして，カーティヤーヤナ（紀元前3世紀）のVt4 ad P2.1.1，及びMBhでは，集合体（saṃghāta）は単一の意味を持つのであるから，部分の数による格語尾導入はないとする(14)。これに対し，ヘーララージャは，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉について論じた時と同様，文における限定・被限定関係を考慮した上での解答を用意する。要素間の関係によって限定された主要素の意味は，部分によってではなく，集合体によって表示される。それゆえに，集合体に付される接辞（vibhakti）は，集合体の意味に基底を置く数を受け入れるのである(15)。

カイヤタ（11世紀）は，MBhに対する複注Pradīpaにおいて，両数格語尾の導入回避に関し，次のように述べている。{rājapuruṣa}という集合体の後に接辞が付加されるべきである。そして，集合体は部分の意味に補助され（upakṛta），単一である数を持つ限定された意味を示すために，それに依拠した単数が用いられる(16)。

一方，ナーゲーシャ（18世紀）は，Pradīpaに対する複々注Uddyotaにおいて，新論理学派の関係概念を用い次のように述べている。統合形の部分をなす従属要素の意味が被限定者性によって制限されても（すなわち，意味を持っていたとしても），限定者としての側面もあり，それは限定者性を覆うもの（ācchādana）である。従って，限定者としては知られるが，本来の形では知られない。従属要素の被限定者性は，主要素の持つ限定者性とは限定・被限定

関係を持たないのである。それゆえ，従属要素は，集合体としての表意を助ける働きは維持するが，はっきりとした意味は持たないのである[17]。

つまり，次項でも述べるが，従属要素が意味を放棄していなくても，その働きはあくまでも，主要素を限定し，統合形全体の意味の表示を助ける，というものにすぎないのである。

2.2 従属要素の意味の二重性

〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉というアスペクトで捉えられる統合形において，従属要素の意味は具体的にいかなるあり方を示すのであろうか。

バルトリハリは，VSk.95cd において，次のように述べている[18]。

> あるいは，他の意味を持つ場合にも，従属要素は二つの意味を持つ，
> と［ある者達は］言った。

ここで，バルトリハリが述べる〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉における従属要素の意味の二重性について見てみたい。

〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉においては，常に従属要素の意味が存在する。ヘーララージャは，限定者，すなわち従属要素によって限定された主要素の意味を，従属要素である語が表示すると考える。つまり，{rājapuruṣaḥ} という統合形において，我々が理解するのは，{rājan} によって限定された {puruṣa} の意味，すなわち「王の家臣」という意味である。この意味を {rājan} という言葉が表示する。すなわち，{rājan} という従属要素は，本来の「王」という意味と，限定された {puruṣa} の意味，「王の家臣」という意味の二つを持つことになる。そのことが，VSk.95において {dvyartha} と言われるのである。

この場合，主要素は被限定者ではあるが，同時に限定者になることはできない。それゆえに，被限定者性を残している従属要素は，限定を受けることはない。結果として，従属要素は，従属する意味，そして，主要な意味の二つを併せ持つことになるのである[19]。

カイヤタは，言葉は一つの意味を持つことも，二つの意味を持つこともあると述べるのみ[20]である。ここには，ヘーララージャが主要素と従属要素の相互の限定・被限定関係から説明したような詳細さは見られない。

ナーゲーシャの見解はどうだろうか。{rājan} の被限定者性の放棄がなかったとしても，{puruṣa} の被限定者性は {rājan} の限定者性に基づく限定を受けるのだから，{rājan} は被限定者性，限定者性の両方を持ちうる。こうして従属要素が意味をより多く持つこと（saṃcaya）もありうる[21]。

この項を通して言えることは，ヘーララージャが〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉，〈ajahtsvārthā vṛttiḥ〉の両方共に，要素間の限定・被限定関係を一方的にとらえず，相互のものとして考えているということである。彼は，従属要素の主要性が放棄されているかいないかの違いだけで，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉の双方の構成要素の意味のあり方の違いを説明しているのである。カイヤタがヘーララージャのこの見解を発展的に受け継いだとは言い難い。しかし，ナーゲーシャはやはり新論理学派の関係概念を用い，ヘーララージャの見解をより厳密に発展させていると言える。

しかし，従属要素の主要性（被限定者性）が放棄されるか否かという問題が，統合形の意味論の問題としてはさほど重要ではないのではないかという印象は否めない。なぜなら，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉の双方において，結局のところ従属要素の主要性（被限定者性）は何の役割も果たさないのである。従属要素Xと主要素Yの間に相互の限定・被限定関係があっても，Xのもつ限定者性がYの持つ被限定者性を限定した後は，Yは限定者としての働きを失ってしまう。ならば，Xが被限定者性を放棄していようがいまいが，XがYによって限定を受ける事はないのである。

結局の所，一見相反するアスペクトの様に思える〈jahatsvarthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉の両者は，分析的な思考の範疇で考える限り，何ら本質的な違いを持たないのである。ならばなぜ，このようなアスペクトの問題が議論の俎上に上るのであろうか。その問題を次項で論じてみたい。

3．〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉

2.でも触れたように，統合形を文から派生するとみなすことや，統合形を従属要素，主要素に弁別することなどは，無知な者を教化するための単なる方便にすぎない[22]。だが，その説明の仕方は，決して定まったものではない。

バルトリハリは，VSk.97において，次のように述べている[23]。

> 無知な者達の理解のためにかくのごとく統合形を説明している者達にとって，人々を理解させる方法は，異なったものであり，確固たるものではない。

パタンジャリは，この問題にはほとんど触れていないが，それでも，「他の語を表示するもの」という統合形の定義については，統合形を文から作られたと説明する者達にとってのものであると明言している[24]。

ヘーララージャは，語分析論者（vyutpādaka）にとっても，その説明方法が様々であることを，好み（ruci）の多様性に帰す[25]。そして，文と統合形は等価であるとする者達，すなわち，統合形は文から派生するとする者達[26]は，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉を容認する。しかし，文と統合形は本質的に異なっていると考えている者達[27]にとっては，本来存在しないはずの要素弁別に依存する〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉は容認できないし，文章の意味理論である差異化と関連付けを統合形に応用することもできないのである[28]。

ナーゲーシャは，この二つの立場に立つ者が，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉という二つのアスペクトを容認しうるかどうかについて，より明確な言明をなしている。統合形を文から派生したものと考える者にとっても，統合形と文は別の物であると考える者にとっても，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉を容認できる。しかし，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉に関しては，その見解は分かれる。後者の立場に立つ限り，統合形はこれ以上部分化できない物であり，従属要素・主要素なる物は存在しない。当然のことだが，存在しないも

のの意味が放棄されるという発想自体が成り立たないのである。それゆえ，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉というアスペクトを容認する事はできないのである[29]。

統合形を本来存在しない従属要素，主要素に弁別する分析的思考の枠内においては，２．２でも述べた通り，従属要素Ｘの主要性が放棄されなくとも，Ｘが主要素Ｙによって限定を受けることがないと考える事で〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉というアスペクトを容認する事ができる。しかし，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉というアスペクトに関しては，むしろ分析的思考の枠内で与えられる説明の側が不自然であるという印象を否めないように思える。分析的思考の枠内では，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉の二つのアスペクトに本質的な違いはない。従属要素の意味が放棄されているかいないかという違いは，重要な要素ではないのである。

〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉という二つのアスペクトの違いがより明確になるのは，むしろ分析的思考を排した時である。説明のために仮定された物に過ぎない従属要素，主要素を認めない限り，そうした物の「意味」を問うことすらが無意味となる。このような立場に立つ者に，「従属要素の意味が放棄される」という発想を押し付けようとしても無理な相談である。そして，分析的思考の枠外にいる者にとっては，当然の事だが，分析的思考の枠内で〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉と呼ばれるアスペクトを，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉として認識する事もまたないのである。従属要素が存在しない以上，それが「意味を放棄しない」という発想もまた彼等には容認できない物である事は明らかであろう。〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉が容認できないのにも関わらず〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉がなぜ容認できるのかを，いずれの文法家も明言してはいない。しかし，分析的思考に基づく文法家の説明が，日常言語の基礎付けのためである事を忘れてはならない。分析的思考を排してでも容認されるアスペクトは，日常言語的アスペクトとしても成り立つものであると考えられる。しかし，本稿においては，この件について断言的に述べる愚を避けたい。

分析的思考の枠内で，文と統合形を等価とみなす以上，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉と〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉のいずれをも説明の方法に用いてもかまわないし，パタンジャリ，バルトリハリ，ヘーララージャの誰も，どちらの説が正しいという意味のことは述べていないのである。

4．結び

以上，統合形の意味論的アスペクトとしての〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉について検討を加えてきた。その結果，分析的思考の枠内における限り，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉という二つのアスペクトの間に本質的な違いは存在しない事が明らかにできた。

二つのアスペクトの最も大きな相違点は，従属要素の主要性，すなわち被限定者性が放棄されているか否かである。しかし，主要素Yの被限定者性が従属要素Xの限定者性によって限定を受けた後に，Yが限定者としての働きを失う以上，Xに被限定者性が残っていようがいまいが，それは重要な問題ではなくなってしまうのである。

しかし，〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉についてのナーゲーシャの説明が，新論理学派の関係概念を用いる事によってP2.1.1の持つ統辞論的な側面を強調し，日常言語的アスペクトから遠く離れた地点に到達した(30)のとは対比的に，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉に関する文法家の議論は，日常言語的アスペクトの側に極めて近い。彼等の説明に覚える違和感は，本来日常言語の側に近い，従って分析的思考によらずとも理解可能なアスペクトに関して，分析的思考による説明を加えている事に由来すると思われる。

〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉について論じた前稿において，人が一関係項に置かれるのに比して，犬小屋にはいつも捨てられたはずの犬の影が付きまとうと述べた。しかし，〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉に関する議論には，中で犬が眠っている犬小屋について，それをどう認識するかを詳細に論じるような滑稽さが付きまとっているのではなかろうか。

(a) テキスト及び略号

MBh:*Vyākaraṇamahābhāṣya* of Patañjali

(1) ed. by F. Kielhorn. rev. by K. V. Abhyankar, 3vols., Poona, 1962, 65, 72.

(2) ed. with the commentary Bhāṣyapradīpa of Kaiyaṭa & superco mmentary Bhāṣyapradīpoddyota of Nāgeśa Bhaṭṭa, ed. by M. M. Pandit Shivadatta Sharma, 6vols. vol.2, reprint ed., Delhi, 1988.

P:*Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini

ed. and English translation by Smitra M. Katre, Delhi-Varanasi-Patna-Bangalore-Madras, 1989.

Vt:*Vārttika* of Kātyāyana:(see MBh (1) (2))

Pradīpa:*Mahābhāṣyapradīpa* of Kaiyaṭa:(see MBh (2))

Uddyota:*Mahābhāṣyapradīpoddyota* of Nāgeśa Bhaṭṭa:(see MBh (2))

VP:*Vākyapadīya* of Bhartṛhari

(1) ed. by W. Rau, *Bhartṛharis Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handshriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlands XLII. 4.), Wiesbaden, 1977.

(2) ed. with the commentary Prakīrṇakaprakāśa of Helarāja, ed. by K. A. Subramania Iyer, Kāṇḍa III, part II, Poona, 1973.

VS:*Vṛttisamuddeśa* of Bhartṛhari:(see VP (1) (2))

PP:*Prakīrṇakaprakāśa* of Helarāja:(see VP (2))

(b) 論文及びモノグラフ

Abhyankar, K. V.[1961]:*A Dictionary of Sanskrit Grammar*, (Gaekwad's Oriental Series No.134), reprint ed., Baroda, 1986.

Cardona, G.[1976]:*Pāṇini. A Survey of Research*, Hauge-Paris.

Subramania Iyer, K. A. [1969]:*Bhartṛhari. A study of the Vākyapadīya in the light of the Ancient Commentaries*, Poona.

-do-[1974]:*The Vākyapadīya of Bhartṛhari*, Chapter III, pt. II. English Translation with Exegetical Notes, Delhi.

Joshi, S. D.[1968]:*Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya Samarthāhnika (P2.1.1)*, Poona.

Renou, L.[1957]:*Terminologie gramaticale du sanskrit*, Paris.

宇野惇 [1977]:「新正理学の術語(1)」,『広島大学文学部紀要』37. pp.85-105.

宇野惇 [1978]:「新正理学の術語(2)」,『広島大学文学部紀要』38. pp.89-109.

宇野惇 [1979]:「新正理学の術語(3)」,『広島大学文学部紀要』39. pp.41-62.

小川英世 [1991]:「パーニニ文法学派における文の意味」,『前田惠學博士頌壽記念 佛教文化學論集』, 山喜房仏書林. pp.543(238)-562(219).

中村元 [1956]:『ことばの形而上学』, 岩波書店.

宮本均 [1996]:「構成要素の意味はいかに放棄されるか —— サンスクリット土着文法学における統合形の意味論的アスペクトに関して(1)」, 『哲学年報』第五十五輯. pp.33-56.

【注】

(1) 宮本[1996:33]を参照せよ。筆者はここで, 「犬の小屋」と「犬小屋」という二つの表現を比べ, 「犬の犬小屋」という表現が成り立ちうるということを述べている。

(2) 宮本[1996]の英文タイトル, 'How does the Consituent Member of Complex Formation(vṛtti) abandon its Own Meaning' に対し, 「動詞 'abandon' は, 有機体を主語とする場合にしか使えぬものであり, 『統合形』のような無機物が意味を『放棄する』という場合には使えないのではないか」という旨の御指摘を頂いた。しかし, サンスクリット文法学の体系においては, 派生等は言わば「自律的に」行われるものである。この場合も, 有機体としての統合形 (vṛtti) が, 従属要素の意味を主体的に「放棄している (jahat)」と考える方が自然であるかのように思われる。

Joshi[1968:76]は, カイヤタ (Pradīpa on MBh on P2.1.1; p.328,b,l.20f) による {jahatsvārthā} という複合語の分解文 (vigraha) 'jahati padāni svārtham yasyāṃ sā jahatsvārthā' に対し, "'that in which the words (i.e. constituents) abandon their own meaning' (we derive) jahatsvārthā" という翻訳を行っている。

(3) MBh on P2.1.1(p.328, a,l.14, p.328, a, l.41): atha ye vṛttiṃ vartayanti, kim tā āhuḥ?/ parārthābhidhānaṃ vṛttir ity āhuḥ/

(4) VP.VSk.94(VP(1)では95):abudhān prati vṛttim ca vartayantaḥ prakalpitām/ āhuḥ parārthavacane tyāgābhyuccayadharmatām//

(5) PP on VSk.94(p.197, ll.1-3):tatra kāraṇāt kāryam adhikārthakriyākāri dṛṣṭam paṭādi/ evam iha api vṛttilakṣaṇasya kāryasya vākyagatapadārthādhikyaṃ nyāyyam iti parārthābhidhānaṃ vṛttilakṣaṇam ārabhyate/

(6) 「放棄」が〈ajahatsvārthā vṛttiḥ〉とは関りのない性質であることは言うまでもあるまい。

(7) MBh on P2.1.1(p.331, a, l.25):atha vā punar astv ajahatsvārthā vṛttiḥ/

(8) PP on VSk.94(p.197, ll.21f):anye tu manyante avasthita eva prācye' rthe' rthāntarābhyuccayo' sāv upasarjanapadānām ādhikyam/

(9) PP on VSk.94(p.197, ll.23):tathā hi sikatākalaśe jalaṃ nihitam avatiṣṭhate/

(10) PP on VSk.94(p.197, ll.23f):lākṣādihetujanitaś ca rāgātiśayas tantunāṃ kārye' py anuvartate/ evam upasarjanapadasya svārtho' rthāntaropādāne' pi/

(11) PP on VSk.94(p.197, ll.25-28):atra api nidarśanam bhāṣye' *bhihitam bhikṣuko* *1 *dvitīyāṃ bhikṣāṃ āsādya* *2 *pūrvāṃ na jahāti*, *saṁcayāya* *3 *eva yatate* *4 iti/ tad iyam ajahatsvārthā vṛttiḥ/

イタリック体はMBh on P2.1.1(p.331,ll.31-33) からの引用であることを，注はMBhテキストとの相違をそれぞれ示す。

*1 bhikṣuko' yam *2 samāsādya *3 saṃcayāya *4 pravartate

(12) MBh on P2.1.1(p.331, a, ll.44f):nanu ca uktam ubhayor vidyamānasvārthayor dvayor dvivacanam iti dvivacanam prāpnoti iti/

(13) PP on VSk.94(p.197, l.28-p.198, l.2):evañ ca rājārthena puruṣārthasya viśeṣaṇād viśiṣṭārthasampratyayaḥ/ yady evaṃ rājārthasya api sambhavād vṛttau rājapuruṣa ity atra dvivacanaṃ prāpnoti dhavakhadirādivat/

(14) Vt4 ad P2.1.1(MBh p.332, a,ll.12f) (MBh (1)では Vt3) :saṃghātasya aikārthyān na avayavasaṃkhyātaḥ subutpattiḥ/
MBh on Vt4 ad P2.1.1(p.332, a,ll.14f):saṃghātasya ekatvam arthaḥ/ tena avayavasamkhyātaḥ subutpattir na bhaviṣyati/

(15) PP on VSk.94(p.198, ll.3-6):iha tu viśeṣaṇaviṣeṣyabhāvāvacchinnam arthāntaram eva anabhidheyam avayavaiḥ samudāyena upādīyate/ yathā bahuvrīhau lohitavasanaś citragur ity ādi/ tataś ca avayavārthāhitabhedasya parārthasya samudāyena abhidhīyamānatvāt tataḥ parā vibhaktiḥ samudāyārthaniveśinīm samkhyām upādatte/

(16) Pradīpa on MBh on P2.1.1(p.332, a,ll.16-19):samghātasya iti/ iha rājapuruṣaśabdāt samghathād vibhaktyā utpattavyam/ tena ca samghātena avayavārthopakṛta ekatvasamkhyāyukto viśiṣṭho' rthaḥ pratipādyata iti tadāśrayam ekavacanam pravartate, na tu guṇabhūtāvayavasamkhyāśrayaṃ dvivacanam ity arthaḥ/

ここでの議論は，以下のPPのものとパラレルである。

PP on VSk.95(p.199, ll.3-8):pradhānopakārāya tu yad rūpam viśeṣaṇatātmakam tan na apaity avirodhād iti na atyantāya jahāti ity uktaḥ/ sarvathā hi svārthaparityāge svapadārthena pradhānopakārābhāvād upasarjanapadaṃ svarūpam eva jahyāt/ paropakāraprabhāvitaṃ hy upasarjanam/ asati ca paropakāre prayogavaiyarthyam, uttarapadād eva pradhānārthapratīteḥ, anarthakasya ca apareṇa saṃbandhābhāvāt sāmarthyanibandhanā samāsasamjñā na syād iti na sakalārthaparityāgaḥ/

(17) Uddyota on MBh on P2.1.1(p.332, a, ll.23-26):tatra yady apy avayavārthas tattadviśeṣyatvāvacchinna eva tathā api viśeṣaṇatvena tasyā viśeṣyātā ācchādanāt tasyā api viśeṣaṇatvena eva pratītir na tu svarūpeṇa iti na viśeṣyaṇādyanvaya iti tātparyam/

(18) VP.VSk.95cd(VP(1)では96):dvyartham arthāntare vā api tatra āhur upasarjanam//

(19) PP on VSk.95(p.199, ll.10-13):ajahatsvārthāyāṃ tu vṛttau sarvathā eva sannupasarjanapadārthaḥ/ svaviśeṣaṇaviśiṣṭam pradhānārthaṃ hi tatra upasarjanapadam abhidadhāti iti dvyartham ucyate/ pradhāne ca pāṃsūdakavad abhedāpatter vivekābhāvāt svaviśeṣaṇena na yujyate guṇapadārthaḥ/ viṣayabhedena ca śabdānām arthavaicitryād vṛttau guṇapradhānabhūtārtha dvayābhidhānam upasarjanapadānāṃ yuktam/

(20) Pradīpa on MBh on P2.1.1(p.331, a, ll.34f):saṃcayāya iti/ evaṃ śabdo' pi kvacid viṣaya ekārthaḥ kvacid anekārtha ity arthaḥ/

(21) Uddyota on MBh on P2.1.1(p.331, a, ll.37-39):rājaniṣṭhaviśeṣyatāyā atyāge' pi puruṣaniṣṭhaviśeṣyatānirūpitaviśeṣaṇatāyā rājapadārthatāsvīkāra eva saṃcaya iti bhāvaḥ/

この部分は，注(19) に挙げた PP の議論と通底しているが，PP において見られた {rājan} が限定を受けることがないという議論はここでは見られない。

(22) VP.VSk.96ab(VP(1)では97):upāyamātraṃ nānātvaṃ samūhas tv eka eva saḥ/

この問題に関しては，宮本［1996:35f］を参照せよ。

(23) VP.VSk.97(VP(1)では98):vṛttim vartayatām evam abudhapratipattaye/ bhinnāḥ sambodhanopāyāḥ puruṣeṣv anavasthitāḥ//

(24) 注（3）を参照せよ。

(25) PP on VSk.97(p.200, ll.12-13):vṛttivākyayor abhedadarśināṃ prakṛtivikārabhāvena vyutpādayatāṃ vyutpādakānāṃ puruṣeṣu pratipattṛṣu sambodhanopāyā vyutpādane hetavo rucivaicitryād bhinnāḥ vilakṣaṇāḥ/

(26) これは，いわゆる「語所作論者 (kāryaśābdika)」を指す。cf. Pradīpa(p.328,a,l.15).

(27) これは，いわゆる「語恒常論者 (naityaśābdika)」を指す。cf. Pradīpa (p.328,a,l.17).

(28) PP on VSk.97(p.200,ll.13-16):ye hi vṛttivākyayoḥ samānam artham adhyavasyanti taddarśanena ajahatsvārthatvam ucyate/ ye tu svābhāvikam arthabhedam anayoḥ paśyanti taddarśanena jahatsvārthatvam ity asaty

abhūtabhedasamsargāśrayeṇa vyavasthā bhidyate/

ここでの議論は，以下のPPにおけるものとパラレルである。

PP on VSk.96(p.199, ll.21-23):vākye vicchedopakramārthābhidhānaṃ, vṛttau tu viśiṣṭo' rtho' bhedena pratīyata iti niraṃśam eva paramārthato vṛttipadam/ upāyamātraṃ tu vākyagatapadārthabhedena vyutpādanam iti prādhānyasya tyāgāj jahatsvārthatābhaṇitiḥ/

差異化（bheda）・関連付け（saṃsarga）を応用した〈jahatsvārthā vṛttiḥ〉についての説明に関しては，宮本［1996:44-47］を参照せよ。

(29) Uddyota on MBh on P2.1.1(p.332, a, ll.28-32):iyam ajahatsvārthā vṛttivarttanavādinas tadavarttanavādinaś ca tulyā// jahatsvārthā tu vṛttivarttanavādina eva/ vṛttyavarttanavādinas tv akhaṇḍāni niravayavāni padāni iti mate ubhayor api kadā apy abhāvena tyaktasvārthā ity arthaka-jahatsvārthāpadaprayogo' py asaṃgataḥ/

(30) 宮本［1996:47f］を参照せよ。